会議レポート

CSCW 2008 参加報告

2008 年 11 月 8 日から 12 日にかけて，CSCW 2008（Computer Supported Cooperative Work）に参加した．CSCW は，ACM 主催で 1986 年から隔年開催されている協調作業支援に関する主要国際会議である．今年は米国サンディエゴのヒルトンホテルで開催された．前半の 2 日間がワークショップ, 後半の 3 日間が本会議であった．

本会議の参加者は約 500 名であり, 4 トラック並列で，ロング・ショートペーパ，チュートリアル，パネル討論会，デモ，ポスタなどのセッションが進行していた．

論文の総投稿件数は 370 件，採択数は 86 件（23%）であった．日本からの発表は後述するようにロングペーパ 2 件, ショートペーパ 1 件, ポスタ 3 件, デモ 2 件であった．

会議の内容は，CSCW の伝統的な研究テーマである遠隔協調作業支援，メディア空間，オンラインコミュニティについての研究だけでなく，近年隆盛している Wikipedia など Wiki を利用した協調システム，社会ネットワーク，ゲーム，健康に関する情報環境，家庭における CSCW など，我々の日常的な状況や IT 環境における協調作業についての研究発表も多く見られた．全般的傾向として，何らかの協調作業支援システムを開発して評価したような発表は少なく，協調作業を観察・分析して新たな知見を得たといった社会学，認知科学，心理学に関連の深い発表が多い印象を受けた．これはパートナ会議である CHI や UIST との分野棲み分けをしている結果であろう．またプログラムチェアがポスタ発表で，世界の地域ごとに投稿数や採択数を比較し，各地域における不採択理由を分析した結果を公開していた．その結果によると，アジア系の採択率がきわめて低く（3%），その原因として論文としての完成度の低さと論文執筆スキルの低さを指摘していた．

日本からのペーパ発表は 3 件とも CSCW の中では少数派に入るシステム寄りと言えるものだった．日本からの研究発表の概要は以下の通りである．中西英之先生（大阪大学）は，遠隔ロボットに設置したカメラを前後に動かし運動視差を与えると，カメラを左右に動かすよりも臨場感が高まることを報告した．葛岡英明先生（筑波大学）は，ロボットが人の興味を引く際，いったん発話を中断してポーズすることが効果的であることを報告した．筆者らは，遠隔ビデオコミュニケーションシステム t-Room を用いた実験を発表した．それは，遠隔地間で座席配置を変えることが話者交代やグループの出す結論に影響を及ぼすというものであった．

基調講演は，その会議の今現在の興味や動向をよく反映しているものである．オープニング基調講演では，EMI music の Cory Ondrejka 氏（元 Linden Lab）が，Second Life を業界大手に押し上げることができた成功秘話について講演した．その成功の大きな理由として，Linden Lab の開発者自身が Second Life を協調作業ツールとして活用して開発を進めた点を挙げた．また，普段の仕事や開発の中から，新しいプログラミング言語，プロトコル，アーキテクチャ開発のアイディアを得ることが重要とのメッセージを述べていた．

クロージング基調講演では，Ontario College of Art and Design の Sara Diamond 氏が，現代デザインの世界でプロジェクトを成功させるための秘訣などについて講演した．現代デザインの世界では日常的に異分野との連携が起きており，頻繁にアプローチや用語，社会や文化に関する摩擦が生じているとして，豊富な実例や経験を紹介した．そしてプロジェクトを成功させるには団結力（cohesion）と自由度（dissonance）のバランスをとることが重要と主張した．

次回の CSCW は 2010 年 2 月 6 日から米国ジョージア州で開催され，2010 年以降 CSCW は毎年開催となる予定である．

（山下直美，平田圭二／ NTT コミュニケーション科学基礎研究所）

左　講演風景
右　Sea World でのバンケット